

# 【ねがいはしては】

令和5年1月2日

KYOWA SCHOOL

第382号

「園田学級のこと」

・灰谷健次郎→日本の児童文学作家。大阪教育大学卒業、17年間の小学校教員を経て児童文学作家として活躍した。  
代表作として「兎の眼」「太陽の子」「先生けらいになれ」など多数。2006年72歳、癌にて没

私の愛蔵書に灰谷健次郎の発言（全8巻）があります。その中の第4巻に載っていることです。

園田先生のクラス（小学6年生・1年生）のでできごとから、灰谷さんは次のように定義しています。

「教育の目的は子どもたちの自立を助けることである。その自明のことを、こんにちの教師ほど逸脱しているものはない。一定の知識を子供たちにつめこみ、その結果が子どものすべてであるとする世界は、人の関係を固定化する。そこでは教師も人間であるという当然のことが忘れ去られ、教師は子どもたちの前に君臨し、管理の教育はいつそう強化されていく。人間の社会でありながら、人のいとおしさとか、共に学びあうことの楽しさは毛頭なく、競争という非情さだけが支配する。（中略）子どもたちにとって教育の場というものは、地獄に等しいもので、そこはもう早くぐり抜けたいだけのなんの希望もない場所になる。」

この著書が発行されたのは、1999年です。四半世紀ほど前のことになります。

さて、園田先生はどのような経験をされたのでしょうか。本文はそれなりに長いものなので、まとめてみました。

ひとつ目、園田先生のクラス（6年生）に、優子さんという児童がいます。その子は園田先生からすると目立たない子として映っていました。テストをするにも手で隠しながら書くような……。先生はそんな優子さんと日記で約束をします。わからないことは勇気を出して手を挙げると、しかしそれをしなかった優子さんを先生は強く叱り、優子さんは泣いてしまいます。同じクラスの女子児童たちからも猛抗議をうけます。しかし、後日、優子さんから返事が来ます。

「先生と約束したことを破ってしまったことを後悔しています。」と。しかし後になって『目立たない子』と見ていたその点が園田先生は教師として至らなかったと反省しています。それがこのできごとになります。

園田さんのクラスでは『ドン』という名前のニワトリの世話をしていました。そのニワトリはとても凶暴であり、他のニワトリとも仲良くしないひとりぼっちのニワトリでした。優子さんはそんなドンに誠意をもって接します。ドンはやがて優子さんに抱かれるまでになつていきます。ニワトリの世話では中心的存在であったことを園田先生は知りませんでした。そんな中ドンは病気にかかります。優子さんは必死になって動物病院へ運びます。しかし一軒目の病院には医師がおらず、二軒目の病院で診てもらったときにはすでに死んでいました。その勇気ある行動を知り、園田先生は深く優子さんに詫言っています。そして優子さんより卒業メッセージカードが届きます。

「ほんとうはもっともっと先生と授業したいけど、もうできません。卒業アルバム・ドンの文集をたいせつにいつまでももっておきます。園田先生も、もっともっといい先生になってください。あまりおこりすぎて、人をきずつけないように！（けいけん者から）かたがこつたらたいてあげていた時、すごくこつたね。あのかたのかたさは、手にしみしみみてきたよ。またたいてあげれる日がくるかも。またその日までれんしゅうしておこうかな。元気でがんばって下さい。いい先生だったよ。思い出ぶかい小学校生活でした。ありがとう ありがとう ありがとう ありがとう しか言えません また会いにいきます さようなら 優子」

もう一つです。今度は1年生の授業です。自由に発言するのが1年生らしくてうらやましいです。

「おとうさんのジマン」という授業です。「ぼくのおとうさん、ラーメンつくるのがうまいね。」「わたしのおとうさん、おすしをつくるのがじょうずやね。」「ぼくのおとうさん、UFO つくるのがものすごくうまいね。」（インスタントのやきそば）「片手でじょうずにつくってくれるね。」「そうや。ヨシ夫くんのおとうさん、片手がないのに、ぼくらにじょうずにヒコーキかてつくってくれるはるね。」「ぼくのおとうさん、ちょっと前、会社のキカイで、手がプチンと切れたのや」「ヨシ夫のおとうさん、すごいな。先生、早よ会いたいな。」

（中略）次は「いのちはひとつやもんな」です。「赤ちゃんが生まれることって、たいへんなことなんよ。おなかの中で死んでしまう人もいるし、生まれたときに首がしまつて死ぬ人もいるよ。そんなにして死んでしまった赤ちゃんは、おとうさんも見ずに、おかあさんも知らずに、もう、ずうっと生まれてこれないんよ」「先生、いのちはひとつやもんな。」「ああ、ぼく、生まれてこれてよかった」そのとき、一番前の席にすわっていた萩谷まどかが、だまつて手をあげた。

「わたしのおにいちゃんね。まだ、わたしが生まれてないとき死んだの」続いて、千葉理絵の手が上がった。「わたしねッ、いもうとに、オヤツだからって起こしにいったらね……。ねていたいもうとが死んで……。」最後のことばを出せずに、理絵は机の上に泣き伏してしまった。今度は名指しされることなく、堀川聡が「エエッとな。ぼくのおねえちゃんな、道でなわとびしてな、なわがなッ、ダンクカーに引っかかって死んでしもて。」

私はこのような授業が真の、真の学びではないかと感じます。そこには評価や競争、強制などありません。

約25年前、灰谷さんが書かれたこと『競争という非情』が今に至っても古さを感じさせないことは、今に至っても何も変化がないことにつながります。子どもたちを救うため、皆さん、この旗（真の学び）を掲げ続けましょう。